北斗句会

北斗句会自選三句（令和三年）

（五十音順）

（二年七月～三年六月の間の三十六句から）

傘　寿　　**石田きよし**

悪事なすやうに傘寿のサングラス
歌留多取る手先鬼滅の刃めく
青鷺の三歩やまたも動かざる

しはぶき　　**大崎石州**

しはぶき一つ妻二つ変はりなし
早朝散歩イヴモンタンの枯葉
往く吾の道草となる花の山

エール　　**太田黒幸風**

兄が逝き順繰り上がる秋の蝉
コロナ禍にエールを送る酉の市
木蓮の白に勝れる白はなし

赤い頬つぺ　　**大森康正**

柔らかな赤い頬つぺに春の風
ひぐらしの呼び込む夜の帳かな
コロナ禍や津々浦々の隙間風

北斗句会

ひとよざけ　竹内雲泉

病床の妻の寝顔やひとよざけ
鷹鳩と化す青空や腕枕
雨しずく丈余に伸びし今年竹

棋　譜　田中資凡

棋聖戦の棋譜をたどりて冷し酒
自転車に積む子走る子母の春
渇きたる蚯蚓の骸朝の黙

声　明　長池豆陽

声明や紅葉降りしく平林寺
賀客然正座に慣れぬ子らの貌
皮をむく泥ねぎ楚々と臈たけり

満　天　深見十万

満天に届けとばかり虫すだく
出来ぬこと又一つ増ゆ落椿
江戸川の波逆立てて春疾風

憂　国　藤田紀潮

神宮の杜の世紀や揚雲雀
大拙の墓碑に動かぬ青蛙
憂国の血潮めきたる冬夕焼

北斗句会

ハイキング　宮下ひかる

国宝の小便小僧冬着なし
夕焼の歌聴きながらハイキング
三渓の愛でつ残せし臥竜梅

旅人　森田光彦

奈良井宿旅人駆くる大夕立
宿坊の闇を深めて鉦叩
父の忌にひとり経読む寒さかな

紅蓮　山縣秀雄

早朝の精気貰ふや紅蓮
夕月夜長椅子ひとつ出されをり
冬麗やメタセコイヤの三角錐

日輪　吉岡誠山

日輪を追うて色づく酔芙蓉
光秀の御霊神社や虎落笛
認知症まだ早すぎる桜餅